
あの時にこの物語は始まった…

山ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの時にこの物語は始まった…

【Zコード】

Z54780

【作者名】

止ひやん

【あらすじ】

普通に暮らしている少年の前に自殺をしようとする女の子。
その子を助けようと決心した少年。

たぶん恋愛？ストーリー

【第一話】（前書き）

初登校なので、
ガムシャラに書いてこいつと思います。

【第一話】

20XX年7月16日 月曜日

初夏

？？？：

あつついな～

なぜこんなに暑いかな～

…さてコンビニに行くか

僕はいつも通りコンビニ行く。

毎週月曜、水曜に通っている。

店員さんにも顔を覚えられている。

さらに！！

名前すら覚えられている。
我ながら情けない。

店員さん：

いらっしゃいま…。

つてまたショウウちゃんか！

とんだ暇人だね～

ショウ：

わる～ございますねー

ま、漫画読んだ後に何か買うから店としては大丈夫だろ？

店員さん：

まあ助かるけど…

僕はいつも通り漫画を読み、今日はプリンを買った。

僕はフランフラとコンビニを出た。
高校の授業終わりに寄ったから薄暗い。
まあいつも通り。

今日は珍しくCDチェックをしたくなつた。
僕は自転車をまたぎフランフラと向かつた。

ショウ：

うわ～

思わず声に出してしまつた。

自転車置き場には大量の自転車。
溢れんばかりに置いてある。

僕の自転車もソコに仲間入りさせた。

中に入るとやはりと言つべきか人がいっぱい。
大変だろ?な…と思いつつも割入つてみた。
案外スイスイと入り込めた。

その時、ふと思い出した。

『あれ?

先週きたんじやね?』

無駄足だった。

店を出て自転車を取つてくる。

誰もいない。

さつきとは大違い。

僕は家に帰る事にした。

ゆっくり帰っている途中に信号につかまつた。
ここでは開かずの信号と言われている。

溜め息をつきながら待っていると隣に同じ学校の制服を着た女の子
がやって来た。

女の子：

もう私は、いらない人間なんだ…
もういいんだ…

と、呟いている。

あまりに深刻そだから声をかけようとした瞬間。
女の子が沢山車が行き交う道路に飛び出した。
ドン

あまりに軽い音がした。

人間が壊れる音はこんなに儚い音なのか…

僕は慌てて駆け寄った。

息はある。

ショウ：

大丈夫か！？

おい！！

これが彼女との初めての出会いだった。

【第一話】（後書き）

読んで下さりありがとうございました。
もうよかつたら続きを読もうとしつぶす願いしますかーー！

【筆 | 振】（漫畫界）

繰り返せました！
ヒルノ、見てくれ……！

【第一話】

周りは暗く、明かりといえば手術中と書いてあるライトだけ。女子の子が救急車で病院に運ばれてから、どれくらい時間は過ぎただろうか：

果てしない時間が過ぎたと僕は感じた。

僕は静かにドビラの横の小さなベンチに座っている。
冷静そうに見えて内心ではとてもパニックになつている。
頭の中は手で直接混ぜられたかのようにぐちゃぐちゃ。
目の前でんな事が起きたがら吐き氣もする。
ダレカ…ダレカボクヲタスケテ……

力チツ

ライトが消えた。

僕は慌ただしく立つた。

すると中から男の人が現れた。
手術を担当していた人らしい。

先生：

大丈夫ですよ。

安心して下さい。

見た目ほど怪我は、ひどくありません。

その後いくつか説明を受けた。

『右足の骨折、左手の腱の切断。
右足はまだ軽いらしい。

しかし左手の腱が悪く切れたため、以前のようには動かなくなるだ

ひとつ。『

との事だった。

僕はどんな顔をして彼女に会えればいいのだろう。
初めて話す子なのに…
どうすればいいのだろう。

【第一話】（後書き）

やつぱり小説は読むのは簡単でも、書く方は難しいなと思いました。プロの小説家さん達は凄いといつゝことひしひしと感じられました。

では、このへんで。

次回もよろしくお願ひいたします。

【第二回】（前書き）

第三話投稿します。

【第二回話】

先生との話も終わり、彼女の部屋に向かつた。
その途中、話し声が聞こえた。

看護婦A：

さつき、救急で運ばれた子いたじゃない？

あの子の事を言つていいのだろうか。
失礼だが少し聞いてみよう。

看護婦B：

いたいた。

それがどうしたの？

看護婦A：

その子の生徒手帳に親の電話番号があつたから連絡したのよ。
何て返事が返つてきたと思う？

『あ、そうですか。』

の、たつた一言で電話を切つたのよ。

看護婦B

なにそれ！

ひつどーい！！

この世界には、そんなに酷い親がいるのか！？
自分の子供が入院してるんだぞ！！

僕は今理解した。

なぜ先生が僕に彼女の状態を話したのか。

看護婦の話を聞き終わり彼女の部屋についた。
彼女のベッドの横の椅子に座った。

と、同時に

女の子：

ん~、ん?

こ...こ...ど...?

彼女は周りをじっと見渡して囁つ。

ショウ：

ここは大成病院だよ。

女の子：

あなた、誰?

女の子：

ショウ：
僕は田口彰

君は?

女の子：

私は、坂本芳佳

僕はさつき看護婦が言っていた事が信じられない。
だってあの看護婦はこの子の名前を言っていないし、そんな酷い親

がいるわけない。

そう思い聞いてみた。

ショウ：

芳佳ちゃん、親はどい…

途中で喋れなくなつた。
返事を聞かなくても分かつた。
明らかな顔色の変化。
これはマズい。

ショウ：

あの……

女の子：

うひ……うひ……

うわーー

泣き出してしまつた。

彼女はこの日、泣き疲れて寝るまで泣き止まなかつた。
僕はただ、

ショウ：

ごめん
…
ごめん
…

と、謝る事しかできなかつた。

【第二話】（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

長く書い、長く書い、と思いつて書いてみても、切りのいい所で終わると一ページ。
次こそがんばります。

次の話もどうかよろしくお願いいたします。

【第四話】（前書き）

【第四話】

朝?

もう朝なのか。

僕は昨日彼女が寝つた後まっすぐに家に帰った。家に帰ったのはいいものの一睡もできなかつた。しかしあう眠れそうにない。

なので朝食を食べに私室を出て1階へ向かう。

1階には父と母がいた。

妹はもう学校に行つたみたいだ。

ショウ:

おはよ。

母:

おはよー。

うわっ

どうじたのその皿の下のクマ---

ショウ:

ちよつと罪れなくてね…

父:

遅くに帰ってきたと思つたら全然食事もとらないで部屋に入つて。

昨日何があったのか?

僕は言えることは全て話した。
話すと楽になれると思った。

父：

そうか。

なら今日は病院へ行つてその子のそばにいてやれ。学校には適当に理由を言つて休みをとつていてやるから。

母：

そうね。

いつてうりっしゃい。

それが今あなたにできる唯一のことよ。

僕は涙が出そうになつた。

僕は準備をしてから病院へ向かつ。
途中で果物の詰め合わせを買った。

病院に着くと病院の中は騒がしかつた。
嫌な予感がした。

急がないと！！

僕はエレベーターのボタンを押す。
しかし待ちきれなくなり、階段であがつた。
嫌な予感は的中した。
的中してしまつた。

芳佳ちゃんは松葉杖でベランダまで行き飛び降つとじていた。
興奮気味らしく息が荒い。

看護婦が一人やって來た。

看護婦：

あの…

ショウ：

言われなくても見れば分かります。それより失礼ですがあなた方はこの部屋から出て下さい。

こんなに人がいるともっと興奮すると思うんです。

僕の願いを受け入れてくれたらしく大勢いた看護婦達はぞろぞろと出ていった。

ショウ：

まずは落ち着こうか芳佳ちゃん。

ヨシカ：

嫌だ！！

私は死ぬんだ。

もういるな子なんだ！！

ショウ：

大丈夫だ。

僕は見捨てない。

僕はゆっくりと芳佳ちゃんに近づく。

ヨシカ：

ありえない。

ありえない。

アリエナイ。

みんな私を見捨てていく。

私を誰も見てくれない。

いなくなつても誰も困らないんだ！！

芳佳ちゃんは右手を降り否定した。

しかし芳佳ちゃんは右手の松葉杖と左足で立っている。バランスを崩し、前から倒れる。

僕は優しく受け止め、優しく抱きしめた。

ショウ：

ほら大丈夫だ。

僕は絶対に見捨てない。

誰も君を必要としないなら僕が必要としよう。

芳佳ちゃんは泣いた。

今度は僕の腕の中で。

【第四話】（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

第四話が頭の中の下書きで一番ボツが多くつたです。
ここまで仕上げるのにだいぶ時間がかかりました。

ありがとうございました。

次も読んで貰えたら嬉しいです。

【第五話】（前書き）

第五話投稿します。
やつべことビーハル。

【第五話】

芳佳ちゃんはその後、何回も何回も噛みしめるよいつに僕に尋ねる。

ヨシカ：

本当に見捨てない？

僕は優しく答える。

ショウ：

ああ、見捨てない。

僕の特技は知り合った人とは、ずっと仲良いいられることが多いんだ。

これは嘘ではない。

ヨシカ：

嬉しい！ 嬉しい！！

芳佳ちゃんは嬉しそうに受けとめる。

（数分後）

ようやく芳佳ちゃんの感情の高まりが静まりベッドに戻った。
僕は頃合いを見計らつて切り出した。

ショウ：

落ち着いた所で僕といくつか約束してくれる？

ヨシカ：

内容によるわ。

ショウ：

分かった。

まず一つ目。

絶対に自殺をしようとしたこと。もし自殺をしようとしたらすぐさまに僕に連絡すること。

僕がこの命にかけても君を救う。

2つ目

私はいらない子だつて絶対に言わない事。

君とは、まだ知り合つて間もないからこれだけだけど、ダメだと思いつことはどんどんこの約束の中に入れていくからね。

ヨシカ：

分かつた。
約束する。

そのかわりあなたも一つ約束して。

私を…見捨てないで。

僕は芳佳ちゃんの手を握りしめ

ショウ：

絶対にその約束は破らないよ。

と答える。

芳佳ちゃんの手は震えていた。

ショウ：

あ！

そうだ！！

もう一つ約束……って、いつか、これはお願ひかな?

前髪を切らないかい?

ほら、いつすれば可愛いじゃないか。

僕は、鼻の頭まで伸びている芳佳ちゃんの前髪を上げる。
マジで可愛い。

前髪がある時はまるで貞子みたいだ。

誰が見てもそういう悪しきだろ。

ヨシカ：

い、嫌よ。

なんで切らなくちゃならなーのよーー。

真っ赤な顔で否定する。

初めて人の顔が赤くなるのを見たかもしれない。

と黙つわけで、

今日はただひたすら喋つた。

趣味、特技、好きな歌手、好きな食べ物 etc .
いくつか同じだという所もありたりで盛り上がった。
あつと黙つ間に時間は流れ、

シヨウ：

そろそろ帰らないと。

ヨシカ：

うん。

そ、その…

ショウ：

また明日でしょ？

「いつのが恥ずかしかつたみたいだから先に言つてあげる。

ヨシカ：
また明日ね。
えへへ。

恥ずかしげに言ひ姿がさらりと變つて。
だけど思つ出す。

学校がある。

ショウ：

「ごめん！！

明日は学校に行かない。

芳佳ちゃんは淋しそうに言ひや。

ヨシカ：

そう…。

これはダメだ。
後に付け足す。

けど、夕方に来るやー！

芳佳ちゃんは明るくなつた。
良かった。

ショウ：

それじゃまた明日。

ヨシカ：

うん。

僕は病室を出る。

そう僕らはまた明日会える。

【第五話】（後書き）

今回初めて芳佳の明るい場面を書いてみました。
なかなか”可愛い”を表現するのが難しかったです。

さてこのへんで。

次回も良かったら読んでみて下さい。

【第六話】(繪畫部)

つこじ六話です。
どうぞお読みください。

【第六話】

ふと気付けば周りは真っ暗。
「デジャヴ？」

なぜここにいるのだろう。
わからない。

そんなことを考えてこると…

ピリリリリ。

ポケットから携帯を取り出す。

ディスプレイには坂本芳佳と書いてあった。

ショウ：

はい、もしもし。

ヨシカ：

返事はない。

もう一度。

ショウ：
もしもし？

ヨシカ：

よく聞けば小さな声で何か言つてこる。

ショウ：

よく聞こえないよ。

もう一回言つ…

芳佳ちゃんは答えた。

ヨシカ：

私もう耐えられない。

死ぬわね。

ショウ：

ちょっと待つて…！

今どいー…？

そう言つた瞬間ぶわっと周りの風景が変わった。
目が慣れた時見えたのは芳佳ちゃんの病室。
芳佳ちゃんはやはりベランダにいた。

ショウ：

待つんだ！

僕は叫んだ。

走つて止めようと思った。

しかし、僕の体は動かない。

足に根が生えているかのようだ。

僕はもがくけれど、動く気配がない。

僕は叫ぶことしかできない。

ショウ：

落ち着くんだ。

いまそつちに行くから。

待つて。

待ってくれ。

僕が一番落ち着いてない。

急がなくては。

イソガナクテハ。

彼女は飛び降りた。

飛び降りてしまった。

僕は彼女を助けてあげることが出来なかつた。

約束を守つてあげることが出来なかつた。

これ以上悔しいことはない。

辺りはいっきに暗くなつていく。

口の中は血の味。

なんて、なんてちっぽけなんだ…

『ショウ、ショウ…』

幻聴？

嫌、違つた。

母が僕の体をゆすつていた。

母：

ショウ、起きなさい。

ショウ：
分かった。

夢だったようだ。

しかしあまりにリアル。

僕は怖くなつた。

こんな心構えで本当に彼女を救えるのか。
寝汗でベチャベチャだつた。

僕は朝食を済ませすぐにメールをする。
もちろん芳佳ちゃんだ。

(メアド、電話番号は昨日交換した)
さすがにあんな夢を見た後だ。
メールを送りたくなるだろう。
だけどメールは返つて来なかつた。

【第六話】（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
今回は”彰の不安”を夢で見たという話です。
無意識の内でも不安は積もると夢に出ると言つ私の実体験を書いて
みました。

次回もよろしくお願ひします。

【第十七話】（前書き）

七話です。
じつわ。

【第七話】

不安がつもる。

しかしここで昼休み。

授業には手が着かず、

ただただ黒板の文字をノートに記すだけ。

弁当を食べ終わり、

自分の机で、ぼーとしていると、

？？？：

あひやひやひやひや！－！

彰のそんな暗い顔初めて見たよ。

あひやひやひやひや！－！

ひーひー。

ショウ：

そんな笑わなくともいいだろ、敦士。

「こいつは由條 敦士

無一の親友だ。

笑われてもそんなに腹はたたない。

こいつはバカ正直だから嘘をつけない。
幼なじみだから、それくらい分かる。

多分、僕はこの四時限ずっととんでもない顔をしていたんだが。

アツシ：

お、お前がそんなに悩むなんて、め、めずらしいじゃない…かつは
ははは…！

ショウ：

笑いながら言つても分からぬぞ…

それを聞いて敦士は深呼吸をしていつもの顔に戻した。

アツシ：

お前がそんなに悩むなんてめずらしいじゃないか。

ショウ：

まあね。

アツシ：

無理には聞かねえが困つたら俺の所に来いよ。
一人より二人の方がいいこともある。

ショウ：

ああ、ありがとな。
肩が軽くなつたよ。

本当に軽くなつたような気がした。

アツシ：

それと、教室にいるときは普通にしてろよ。
みんな心配してる。

じやな。

と言い、敦士はどこかに行つてしまつた。
僕は周りを見渡す。

みんな心配そうな目で見てくる。
全然気づかなかつた。

僕はみんなに謝った。

（放課後）

僕はすぐに病院へ向かつた。

大丈夫だと思うが無意識に早足になる。

病院に着く頃には汗だくでゼーゼーだった。

自分の体力の無さに嫌気がさす。

まあ部活は、やってないしな。

と自分に向けて言つ。

うん、病室へ行こう。

部屋に入ると芳佳ちゃんはベランダにいた。

ショウ：

…っ！？

僕は走つた。部屋を走つた。

僕は芳佳ちゃんの怪我していの方の手を取る。

ヨシカ：

何！？

どうしたの！？

ショウ：

落ち着くんだ。

はやまるなーー！

ヨシカ：

あなたが落ち着いて…。

ショウ：

へ？

芳佳ちゃんは風邪にあたりにベランダに出ていたらしい。
メールは見なからしい。

いや、ここは見れなかつたと言つた方がいいだろう。
なぜなら、芳佳ちゃんは僕が帰つた後、前髪を切つた。
今日見せて驚かせようと思つた。
けど、前髪を切つたよとメールしたい自分がいた。
だから携帯の電源を切り引出しにしてしまい我慢していらっしゃい。
僕は笑つてから言つ。

ショウ：

やつぱりかわいいよ。

ヨシカ：

…バカ。

芳佳ちゃんは耳まで赤くして言つ。

【第七話】（後書き）

これを書いていて不覚にも、
敦士いいやつだなあ
と、自分で思つてしましました。

良かつたらコメントと感想を…
次の話もよろしくお願いします。

【第八話】（前書き）

八話投稿します。

【第八話】

今日は夢の話で盛り上がった。
自分的には恥ずかしかつたけれど、芳佳ちゃんが喜んでくれればOKだひつ。

こんな話もやるやう終わらなければならぬ一時間が来たとき、芳佳ちゃんは切り出した。

ヨシカ：
あのさ。
提案なんだけど…

ショウ：
うん。

ヨシカ：

”ちゃん”とか”くん”って、よしよししい呼び方やめない?

ショウ：

…え?

ヨシカ：

だから、呼び捨てでいいんじゃない?

ショウ：
いいけど…

少し恥ずかしくないか?

と詰むつとしたが、その言葉を僕は呑み込んだ。

ヨシカ：

じゅ、じゅあ彰、、、

ショウ：

よ、よ…芳佳。

『デジカーン』

と頭の中で感情と言ひなの爆弾が弾けて空になつた。

放心つてこれの事を言つんだな。

ヨシカ：

彰、彰！、

しつかりして。

揺さぶられ、よひやく現実へと帰還。

僕は大丈夫か？

これくらい普通に出来て当たり前だらう。

それから数分後。

僕は病室をあとにした。

その帰り道ふと気づいた事がある。

彼女の病室をあとにした時に僕を取り囲むの寂しさと夢とは何だらう。

分からない。

翌日、結局正体が分からなかつた僕は経験豊富な敦士に聞いてみる
ことにした。

ショウ：

…といふことなのかな。
これどういふものなんだ？
自分じゃ理解できないんだが。

敦士は開いたクチが塞がらないと呟つ感じの顔をしている。
しまいには一人で頷き、つぶやき始めた。

アツシ：

そうか。
よつやく彰も…

ショウ：

お~い。
一人の世界に入り込まないでくれー。

アツシ：

あ、悪い悪い。
分かった。
单刀直入に言おひ。
それは恋だ。

ショウ：

恋！？

アツシ：

そう。

あの万病に効くと言われる草津の湯でも治らない恋の病だよ。

ショウ：

オヤジ臭いぞ。

アツシ：

とにかく。

お前はみんなと平等に接してきた。

男女平等にな。

だから恋なんて感情を抱いたことがなかつたんだ。

そして初めて恋をしたからそれが理解できなかつたんだよ。

ショウ：

そうなのか。

と頷きながらも納得できなかつた。

敦士の言つとおり恋と言つものを一度もしたことがない。

本当にこれが恋なのか？

僕は分からぬ。

【第八話】（後書き）

感想、コメントお待ちしております。

【第九話】（前書き）

九話いつてみましょ。う。

【第九話】

結局、昨日はモヤモヤとした気分のままだった。
そう。

霧がかかってよつたモヤモヤ。

なかなかに気分が悪い。

しかしその霧の中に一つの点がある。

その点に視点を合わせ、徐々に近づいてみる。

『ずっと芳佳のそばにいたい』

これが恋?

やはり分からぬ。

放課後。

ダイソーと果物店に寄つていぐ。

彼女の所に近づくにつれて楽になつていくよつた気がする。

ショウ:

芳佳ちゃん、また来たよ~。

芳佳ちゃんはふくれつ面になる。

僕は何かしたか!?

記憶を辿つてみる。

新しい順から:

挨拶をした。

病室に入った。

学校をでた。

授業。

家を出た。

起きた。

寝た。

家に帰った。

病室を出た。

約束をした。

約束…

ああ、そういうことか。

ショウ：

今日も来たよ、芳佳。

僕は訂正をした。

ヨシカ：

いらっしゃい。

待つてたよ、彰。

僕はバスケットを芳佳ちゃん…

訂正。

バスケットを芳佳に渡し、近くの椅子に座る。

ショウ：

調子はどう？

ヨシカ：

良いわよ。

先生がね、足の治りが早いから来週には退院できるかも、だって。

ショウ：

マジで！？

おめでとう。

そう。

芳佳の足は、たいした怪我じゃない。
治りが早いのも頷ける。

ヨシカ：

ありがとう。

嬉しそうに答える。
僕も素直に嬉しい。

その時、

ぐう～～

と僕の腹がなる。

ヨシカ：

…ツブ。

あはははは。

ショウ：

あはは…

恥ずかしい。

ちょっとした沈黙の時に鳴ったため響いた。
顔から火が出そうだ。

ヨシカ：

彰が持つて来てくれたリンクを食べましょ～。

ショウ：

ありがとう。

芳佳はバスケットからリングゴを取り、僕に渡す。

僕は百円均一で買った果物ナイフを手にとりリングゴをむく。
僕はリングゴを初めてむいた為かリングゴがイビツな形に精製されいく。

そんな様子を見た芳佳は耐えきれなくなつたらしく、

ヨシカ：
ナイフの握り方はこう。

と僕の手をとり正しい握り方にする。

ドクン

胸が苦しくなつた。
けれど辛くない。
ずっとそばにいたい。
ずっと触れていたい。
僕はようやく理解した。
これが恋なんだなあ。

半分綺麗にむけたリングゴを八等分にする。
皿にのせ、芳佳に渡す。

ヨシカ：
はい。

芳佳はリンゴの一つを僕の口に向かって持つてくれる。

シラウ：
あーん。

食べる。

リンゴは甘く、そして美味しかった。

【第九話】（後書き）

ありがとうございます
彰が恋をようやく理解するといつ話でした。
御意見、御感想をお待ちしています。

【第十話】（繪畫集）

おひこ十話行きました。

【第十話】

人はなぜ異性と愛し合つたりするのだろうか。

自分のため？

あるいはその人のため？

僕は自分のためでもありその人のためであると思つ。互いに支え合い、助け合い、暮らしていく。

ただの他人同士じゃ無理だろう。

分かり合つた者なら、お互いを分かち合つた者ならどんな壁でも乗り越えられる。

そういうモノだと僕は思う。

だから僕は人を愛せなかつた。

いや、愛することができなかつた。

僕は『人を支える』ようなチカラを持つていない。

だから恋を、愛をしたことがなかつた。

しかし僕は…

ゴーン…

僕は顔面から電柱にぶつかつた。

そうとう痛い。

登校中に考え事をするものじゃないな。

まだ頭の中でゴーン…と鳴り響いている。

学校に着くと敦士がいた。

それともう一人。

敦士の彼女。

ガールフレンド。

ミズキ
水城奏

が教室で、一人きりでいた。

この子も幼なじみ。

そしてこの一人は付き合つて一年とちょっと。

高校入学と同時に付き合つている。

アツシ：
よ、よ、う。

ショウ：
朝からお熱いこと。

カナデ：

なにもしてないわよ。
ただ喋つてただけなんだからね。

ショウ：

ふうん。

そうなんだ。

明らか不自然な一人。

まあ仕方ないか。

付き合つているんだから。

～五時限目～

今日は平和に時間が過ぎていく。

弁当を食べ腹が膨れて心地よい眠気に身をまかせ寝る。するとポケットの携帯のバイブで起された。

先生にバレないよつに見る。

メールを見た瞬間眠気が吹き飛んだ。

すぐに机の上を片付けカバンに突っ込んだ。

そしてカバンを持ち教室を出ながら

ショウ：

先生、気分が悪いので帰ります。

と言い走り出す。

先生は何か言つているがそれどころじゃない。

急いで向かわなければならなかつた。

あの子のところへ。

【メールの内容】

From 坂本芳佳

Sud ごめんね

Text 約束守れそうにない

【第十話】（後書き）

読んで下さりありがとうございました。
御意見、御感想をお待ちしています。

【第十ー話】（前書き）

第十一話投稿します。

【第十一話】

僕は走った。

ただひたすらに走った。
がむしゃらに走った。

これじゃこの前に見た夢を再現しているだけじゃないか！！！

「第六話参考」

今回こそ止めてみせる。

同じアヤマチを一度と繰り返してたまるか！！！
まずは病院に行くべきと判断した。

バンッ

乱暴に扉を開け中に入るが芳佳はいなかつた。

どこに行つたんだ！？

ショウ：

僕は頭の中でこの病院の地図を広げる。
誰も立ち入らなくて人気の無い場所。
そんな場所あるわけ……

ショウ：
あつた！！

僕はまた走り出す。
ある場所へ向かって。

その場所とは屋上だ。

なぜならあそこは老朽化が進み工事をする為に一昨日べりこに立ち入り禁止になつてゐる。

ちなみに工事開始は四日後の正午。
なぜこんなに詳しいかと言つと昨日、入口に紙が貼つてあったから見たのだ。

バンツ

再び乱暴に扉を開ける。

屋上に出て一番遠い所に芳佳はいた。

ショウ：

待つんだ、芳佳――――――！

精一杯の声で叫ぶ。

芳佳はビックリしてじっとを見る。

ヨシカ：

私、生きていたらダメな子なの――――

ショウ：

待つて、今そつちに行くから――――

ヨシカ：

さよなら。

今までありがとうございました。

飛び降りる体制をする。

僕は走る。

間に合え！

間に合え！！

間に合え！！！

芳佳は動かない。

芳佳のまわりだけ時間が止まつたかのようだ。僕は一気に駆け寄り一気にこちらに引っ張った。そして芳佳を受け止める。

ヨシカ：

……イヤ。

死にたくない。

死ななきやいけないのに彰が頭の中に現れてつづつとそばにいたい。

そんな気持ちが私を引き止める。

なんで！？

どうして！？

今までこんな気持ちなつたことないのに……

うわー———っ

僕は芳佳を抱き締め、

ショウ：

僕もずっと芳佳のそばにいたい。

誰が何を言おうと君のそばにいて君を守るわ。

そう、僕はずっと人を支える力は無いと思っていた。

だから愛することができなかつた。

しかし、守りたい人ができた。

支えるよりもずっと大事な事。朝に考えていた問いの答えがよひつか
く出た。

僕は芳佳を守りたい。

病室に戻り、芳佳の話を聞いた。

芳佳：

私の両親は本当の両親じゃないの。

私が5歳の時にお母さんが病気で亡くなつたの。

それからお父さんは私を大事に育ててくれた。

本当に感謝してる。

そして私が小学校に入つて数ヶ月の時、お父さんは再婚した。

私と義母は最初は仲が良かつた。

本当の家族みたいだつた。

しかししだいに義母は掃除、洗濯、ご飯を作る事を押し付けるようになつた。

さらに、義母はお父さんが私を育てながらもこいつこいつと貯めてきたお金を湯水のように使い出した。

みるみるに鞄や服が増えしていく。すぐに貯金は尽きた。

お金が無くなるとすぐに義母は浮氣をしだした。

お父さんが帰りの遅い日は決まって愛人が来る。

こんな生活を耐え忍んで2年。

小学校3年生の時、お父さんはガンで亡くなつた。

それからは…

言いたくない。

ショウ：

うん分かつた。

話している間ずっと辛そうだった。
聞いている僕がどうにかなりそうなくらいだ。

ヨシカ：

そして今田お母に義母に電話をしたの。
あと一週間くらいで帰りますって。
するとこんな返事が返ってきたの。

『あんた生きてたの。

てっきり死んだと思つて荷物全部捨てちゃったわよ。
てかなんで生きてんのよーー！

そのまま死ねばいい』

つて。私生きてちゃイケないんだつて。

芳佳は震えていた。

僕も震えていた。

芳佳は悲しみで、僕は怒りで。

そんな親がいていいのか、嫌ダメに決まってる。

ショウ：

そんな家に帰る必要はないーー！
そうだ僕の家に来たらいい。

ヨシカ：

いいの？

ショウ：

ああいいとも。

ヨシカ：

…ありがとう。

ありがとう…！

…つして芳佳は僕の家で暮らすことになった。

【第十ー話】（後書き）

どうでしたか？

芳佳の過去を書きました。

書いてけつこつ難しかつたです。

御意見、御感想お待ちしています。

【第十一話】(福地)

遅れました(汗)
アリス、おひくつ。

【第十一話】

ヨシカ：
うわ～。

大きな家だねっ！！

ショウ：

両親がいいところに就いているからね。

あれから数日後。

今、芳佳は僕の家の前にいる。

今日からはここが芳佳の住む家なのだ。

ショウ：

さあ入つて入つて。

ヨシカ：

お邪魔します。

まずリビングに向かう。
扉を開けると、

パンッパンパンッ

盛大に鳴り響くクラッカーの音。

父・母・妹：
よしこそ芳佳ちゃん
今日からよろしくね！

父さんがとても照れくさそうだ。

サプライズだ。

ちなみに僕はこのことを知らない。

僕は顔に出るタイプだから知られなくて当然。

肝心の芳佳は…

とても嬉しそうだ。

ここで僕は家族の紹介をした。ショウ：
まずは我が家の大黒柱の…

父：
げんどう
玄道です。

ゲンさんもしくはお父さんと呼んでくれ。

ショウ：
さあ次は我が家の支え人…

母：
れいこ
礼子です。

れいちゃん…はもうあれだから、お母さんって呼んでね！

ショウ：

最後に僕の妹の…

妹：
まりさ
真里沙です。

マリちゃんか…

マリちゃんつて呼んでね。

ショウ：

どつちもこつしょじやないか！！

妹：

いつしょじやないもん！
発音が違つもん！！

笑いが起つた。

さつきまでガツチガチに緊張していた芳佳もちょっとほぐれたよう
に感じた。

ショウ：

えつと、妹が12歳だから小学3年生。
父さんが40歳。
母さんがよゲフ。
母さんの拳がみぞおちに撃ち込んできた。
全然見えなかつた。

ショウ：

ゴホッゴホ
暴力反対～～～！！

母：

女性の年齢を言つのが悪いわよ。

ショウ：

なんだよそれ…
まあいいけどや。
んじや芳佳。

ヨシカ：

うん。

今日からお世話をになります坂本芳佳です。
よろしくお願ひします。

全員：

よろしく。

父：
芳佳ちゃん、条件を一つ出していいかい？

ヨシカ：

はい。

なんでしょう？

父：
うん。

敬語をやめて欲しい。

今日から僕達は家族だ。

これが唯一の条件。

ヨシカ：

はい。

芳佳はとても嬉しそうだ。
少し涙ぐんでいる。

母：

よしー！

じじいお腹にしましょー

わあわあーー

その日の宿は超豪華だった。

【第十ー話】（後書き）

御意見、御感想お待ちしています。

【第十一話】（前編）

十二話投稿いたします。

そして第十一話の間違いを訂正したいと思います。
真里沙は12歳の小3ではなくて9歳の小3です。
ルークさんありがとうございます。

でござりまへつとビハビ。

【第十二話】

昼飯後、僕は芳佳を芳佳の部屋に案内する。窓は2つで、机とベッド、そしてマット。必要最低限の家具しかない。

今は殺風景。

次第に増えていくだろう。すると芳佳はベッドに腰掛け、

ヨシカ：

はあ～

おいしかったーっ！！

満足そうな顔を見るとこからも『食分が良くなつてくる。そんなことを考えていいと、

ヨシカ：

彰の家の『ご飯』ついもあんなに豪華なの？

ショウ：

いや……

あんな豪華な『ご飯』は初めてだよ。

高校に受かった時も豪華だつたけどそれ以上だよ。

正直食べれなかつた。

芳佳もいっぱいぱいだつたように見えた。

ショウ：

高校と言えば芳佳も僕と同じ高校なんだよね？

ヨシカ：

そうなの？

つてなんで私の行つてる学校を知つてるの？
もしかして私のストーカー？

顔が笑つている。

冗談のつもりだろ？

ここはこの冗談に乗るべきだろ？

ショウ：

そうだよ。

君を助けたのも君をつけてたからなんだよ。

こんな冗談はさておき、

本題に入ろうか。

ショウ：

本当は事故の時着ていた服から判断したのさ。

ヨシカ：

ああなるほどね。

そりや分かりやすいわよね。

私たちの学校の制服は周りの学校に比べて目立つものね。

ショウ：

そうだよね。

時々制服で町を歩くのが恥ずかしかつたり…

ヨシカ：

そうよね。

そうだ！！

何年生なの？

私は2年生なんだけど。

ショウ：

僕もだよ。

ちなみに1組だよ。

ヨシカ：

私は7組。

同じ年だつたんだね。

てつきり1つ上なんだと思つてた。

ショウ：

そりなんだ…

なぜかショック。

ヨシカ：

「めん」「めん。

??:?:

芳佳ちゃん。

ヨシカ：

はい！

なんでじょつ？

母：

一緒に晩ご飯の買い物に行きましょう。

ヨシカ：

OKですよー

母：

やつた～！！

女の子と買い物に行くのが夢だったのよー！

ショウ：

妹がいるだろーー！

母：

あの子は昔から面倒くさがって来ないのよ。

さあ芳佳ちゃん早く行きましょーー！

行つてきまーす！！

お母さんは芳佳の手を強引に引っ張りまるで突風のように走っていました。

しかし1つ疑問が残った。

僕は学校では結構顔が広く友達がかなりいるが芳佳の話を聞いたことがない。

どうしたことだろう。

【第十二話】（後書き）

御意見、御感想お待ちしています。

【第十四回】（漫遊）

君たちが少しでもおもしろいところがあるのか。

Good bye 2010
Welcome 2011

／(< o >)／

と云ふやうな顔つきで、いつまでもこのまま居た。

【第十四話】

ショウ：
はあ：
もう朝か～

結局昨日のモヤモヤが晴らされることなく不快な気分でキッチャンへ
向かう。
ほとんど寝ていねい。

ショウ：
おはよ～。

母：
おはよー。

キッチャンには妹、母がいた。

父は朝早くに出ると言つことを聞いている。
一人足りない。

ショウ：

芳佳は？

今日一緒に学校に行く予定だつたはず。

母：
気分が悪いから休みます。
だって。

ショウ：

そつか。

なら仕方ないな。

母：

私から先生に連絡いれるわね。

ショウ：

頼みます。

芳佳は休み。

なら僕はちょっと調べてみようと思つ。

芳佳の事について。

このモヤモヤを払うすべはコレしかないと思う。

しかし、芳佳のプライバシーに触れたらどうする？

……………「ーん。

その時は素直に謝るしかない。

もし最悪な結果を聞いたとしても僕はこれまで通りに接していくれる
だろう。

いや、接していくる。

僕は覚悟を決め学校へと歩き出した。

《昼休み》

僕は七組の友人の元へ向かう。

富士

ふじ

もりすみ

澄

クラス委員長兼書記長。

クラスにも慕われ、芳佳の事を聞くには持つて来いの人物だ。

ショウ：

やあ。

モリス：・

やあ。

二週間ぶりだね。

どうしたんだい？

なにか真剣な顔をしているけれど。

僕に質問かな？

ショウ：

そりなんだよ。

今日はこのクラスにいる子の質問なんだ。

モリス：・

ほづ。

君が人に関する質問なんて珍しいね。

まあそれはさて置き、内容を聞こうか。

ショウ：

坂本芳佳についてなんだけど…

モリス：・

彼女か…

まあ答えよう。

彼女はこの学年にはいる。

そして彼女はあまり顔を見せない。

ショウ：
どうして？

モリスミ：

なぜ来ないのか分からぬ。

そして

“誰も近づかない”
と言つたらいいのか、

いや違うな。

“自分から塞ぎ込んで周りが近づけない”
と言つた方が適當だな。

そのせいでのクラスに友達がないと言つても過言ではないと思
う。

ショウ：

そつか…

ありがとう。

僕は逃げ出すよつて七組を後にした。

いや。

逃げたしたかつたんだ。これ以上話を聞いているとどうにかなりそ
うだ。

だけど今日芳佳が学校に来ない理由が分かった。

明日からは連れてくる…！

そう決心した。

【第十四話】（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

【第十五話】（前書き）

十五話登校します。

最近宿題や用事が忙しくてなかなか続きを書けませんでした。
では今回は結構長く書いたのでいやすくり。

【第十五話】

（放課後）

長い長いホームルームが終わり、僕はすぐに家へ帰ろうとした。

アツシ：

彰！！

最悪のタイミングで呼び止められた。

敦士の事だからどうせ…

アツシ：

野球しようぜ！！

ショウ：

やらない。

じゃあな。

そう。

敦士は野球好きなのだ。

人数が足りないなら公園にいる小学生までを巻き込む。

なかなか迷惑なやつに思われるけれど、なぜか野球をした後は心地

良い爽快感。

いや、達成感だな。

全力でさせられる。

他でもない敦士に。

敦士とやると軽くするつもりが全力でやらされると

そんな特殊な能力を持っている。

アシシ：

ちゅ、お前最近ちゅうと冷たくね？

ショウ：

僕だつて暇じやないとだつてあるんだ。

アシシ：

ここ一週間以上聞いてるが、それ。

ショウ：

すまんな、本当に忙しいんだ。

アシシ：

分かつたよ。

またそいつくんここの小学生とするわ。

ショウ：

また埋め合わせするよ。

と聞こ教室を出た。

ヨシカ：
おかえり。

ショウ：
ただいま。

ショウ：

あれ？

1人？

ヨシカ：

うん。

そうだよ。

グッドタイミングだな。
よし。

ショウ：

芳佳。

僕の部屋に来てくれる？

芳佳は顔を赤らめる。

ヨシカ：

う、うん。

分かった。

何か決心したように言つ。
なぜだろう。

おかしなことを言つただろうか…

芳佳はスタスタと2階に上がる。

（部屋）

芳佳はそわそわしている。

初めて入った…でもないし。

まあいいか。

ショウ：

单刀直入に聞くよ。

今日学校を休んだのは学校に行きたくないからだよね？

芳佳は待ち構えていた言葉とは違つたらしく返事に困つている。
あわあわと。

ヨシカ：

な、なんでそういうの？

少し落ち着いてから聞き返す。

ショウ：

悪いと思つたけれど芳佳のことを調べた。

ヨシカ：

……………そう。

ショウ…

先に謝るよ。

ごめん。

深々と頭を下げる。

しかし芳佳は、

ヨシカ：

いや仕方ないよ。

突然一緒に登校する約束を破つたんだから。

少し間が空いてから、

ヨシカ：

うん、そうだよ。

行きくなかったんだ。

私友達いないし行つても意味がない。

私が学校に行つても場違いな目で見られるだけ。
本当に意味がないんだよ。

ショウ：

そんな事はない！！

僕は叫ぶ。

僕はできる限り叫ぶ。

ショウ：

富士最澄に聞いた。

クラスの子はみんな話しかけようとしてた。

しかし芳佳はふさぎ込んで聞こうともしなかった。

そうだろ？

ヨシカ：

うん。

ショウ：

それは芳佳が悪い。

しかしそれは過去の話。

それは取り戻せない。

ヨシカ：

そう。

あれは私のせい。

だけど今は違う。

彰のお陰で変わった。

変わることが出来た。

本当は学校に行きたい。

行ってみんなに謝りたい。

けど怖い。

どうなるか分からない。

それが本当に怖い。

足が竦むの。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

怖い…

途中で僕は抱きしめる。

優しく、赤ちゃんを抱くよ。

ショウ：

そんな時は素直に人に頼ればいい。
ここにいるじゃないか。

あの時誓つた人間がすぐ近くに。

ヨシカ：

彰…
彰…

ありがと…
うわあ——！

何度も僕の胸の内で泣いた。

もちろん泣きやむまであります。

僕は聞いてみた。

なぜあんなに顔を赤らめてソワソワしていたのかを。

ヨシカ：

私達もう付き合ってるじゃない？

付き合ってる人の部屋に入るのって恥ずかしくて…

ショウ：

へ！？

付き合つてるって僕達が！？

ヨシカ：

そうよ。

私の事を守るって言つてくれたじゃない！？

ショウ：

うん。

確かに言つたよ。

ヨシカ：

あれって告白じゃなかつたの？

ショウ：

そんなつもりで言ったつもりは無かったんだけど…

ヨシカ：

そうなの…

明らか悲しそうな顔をする。

芳佳のこんな顔を見たくない。

僕は決心した。

芳佳の目を見て手を取りゆりくへつと噛みしめるように言った。

ショウ：

僕と付き合つて下さい。

そして僕はようやく芳佳に自分の気持ちを伝えることが出来た。

僕達は付き合つことにした。

【第十五話】（後書き）

ようやく彰が自分の気持ちを伝えることが出来ました。
変わったのは芳佳だけでなく彰も変わったのです。

御意見、御感想をお待ちしております。

【第十六話】（前書き）

第十六話投稿します。

寒いですね～。

私の住んでいる場所は月曜日の雪が大変でした。
部活も雪合戦になりました。

みなさんどうでしたか？

てなわけで「ゆっくつと見て下せー。

【第十六話】

翌朝、僕は少し早めに目が覚めた。
少し緊張しているのかもしれない。

下に降りてキッチンに向かうと芳佳は既にご飯を食べていた。
目の下にはクマがあり、見るからに眠れていない。

ショウ：
おはよー。

ヨシカ：
おはよー。

ショウ：
よく眠れた？

ヨシカ：
いや：
全然眠れなかつたよ。

俯きながら答える。

ショウ：
そつか…

僕はそう言いつつ、芳佳の後に移動しあもいつついでばした。

ヨシカ：
ひや…つ…?

彰！？

ちゅ、やめつ…あはは
わやははははは

笑こすれて苦しみだからしゃべりで止めておひへ。

ヨシカ：

何するの！？

はー…はー…

ビックリするじゃない。

肩を激しく上|下させながら叫び。

ショウ：

どひ？

緊張はほぐれた？

ヨシカ：

…え？

そういうえば…

ありがとう。

…氣をつかってくれて。

顔を赤らめて言つ。

やつぱり可愛い。

ショウ：

どうこたしまして。

実は僕も緊張してたりするからさ。

ヨシカ：
そつ。

だつたら…

芳佳はワキワキと指を鳴らしながら近づき（じづけ）たらあんなに
別々に指が動くのだ（ひ）。）僕を（い）やばした。

ショウ：

やめてくれ～ははははは

僕の声は家中に鳴り響いた。

（学校）

朝のやり取りがあつて芳佳の顔は少し明るくなつたものまだ暗い。
そんなことも構わず時間は過ぎる。

朝のホームルームが始まる前に終わらせなければならぬ。
教室の前に立ち一人で深呼吸をする。

スーサー、スーサー

ショウ：

準備はいい？

ヨシカ：

うんっ！

ガラツ

勢いよく扉を開ける。

みんな驚いてこっちを見ている。

ヨシカ：

皆ささいきなりですみませんが、どうか私の話を聞いて下さい。

芳佳はゆっくり、ゆっくりと話し出した。

自分の過去やみんなの話を無視していた理由を。
それは数分間におよんだ。

芳佳は涙をこぼしながらも頑張り話し続けた。

みんなは茶化すことなく黙つて聞いてくれていた。
真剣にしつかりと噛みしめるように。
中には静かに泣いている子もいる。

芳佳：

です。

だから今更言つても厚かましいだけかも知れませんが、私と友達になつてくれませんか？

女生徒A：

そんなの当たり前じゃない！
ねえみんな！！

男生徒A：

そうだよー！

女生徒B：

当たり前よ！

みんな、いや全員が立ち上がりそつと這つのだつた。

ヨシカ：

ありがとう…

ありがとうみんな。

ついに芳佳は泣き出した。

今回は“悲しい涙”ではなく“嬉しい涙”だった。

【第十六話】（後書き）

さて、いよいよ終わりが見えて来ました。
予定では次が最終話になります。
御意見、御感想をお待ちしています。

【第十七話】（前書き）

最終話投稿します。
よろしくお願いします。

【第十七話】

今僕は鉄の車に乗っている。

その鉄の車はガタンガタンとゆっくりと昇っていく。

そして鉄の車は頂点に達する。

その刹那、急降下した。

ヨシカ：
キャー――ツ

ショウ：
ギャー――――――！？

そう、僕は遊園地のジェットコースターに乗っている。
なぜ僕がここにいるのか。
それは5日前にさかのぼる。

（5日前）

それは下校中の事だった。
僕が切り出した。

ショウ：
なあ芳佳：

今度の休みに2人で遊園地に行かないか？

ヨシカ：
……え？

今、なんて言ったの？

ショウ：

だ、だからセ…

今度の休みに2人で遊園地に行かないか？

ヨシカ：

えーと、処理できないからちょっと待ってね。

『うーん』と唸りながら今伝えた事を飲み込んでいく。すると時間が経つにつれて芳佳の顔は赤く変わっていく。
そして…

ヨシカ：

はい。

よろしくお願ひします。

（当口）

…と今に至る。

芳佳は絶叫系が好きらしく、この遊園地にある5つのジンギスカンバーに行くと言いついた。
正直に言おう！

僕は絶叫系が苦手なのである。
1つ田乗つただけで田が回る。

ショウ：

ちょっと休憩…

ヨシカ：

よし！

次行っちゃお～！！

芳佳は興奮し、僕の話を聞いてくれない。

芳佳に引きずられ全てのジエットコースターを乗った。

すばらしく気分が悪い。

田がぐるぐると回り地面までも回っている。

ああ…

もうだめ。

ガクッ

ヨシカ：

ちょっと彰！

彰どうしたの…

芳佳の声が遠くなる。

ふと田が覚めると田の前には2本の綺麗なスラッシュした足が…
なんとベンチの上で膝枕させてもうつっちゃっている。
なんなんだろ？

このみんなが羨ましがるようなシチュエーションわーーーー。
しばらくの間寝たフリをしようかなと考えていると、

ヨシカ：

彰、起きたんだね。
良かつた。

バレていた。

いつの間にかあたりは暗くなっていた。

ヨシカ：

ごめんね。

彰は絶叫系は苦手だつたんだよね。

ショウ：

…いつから気付いたの？

ヨシカ：

最後のジェットコースターの時に気が付いたの。
あまりに顔色が悪かったから。

けど彰は大丈夫だつて言ったの。
そしたら彰は倒れちゃつて…

私のせいだよね…

彰には迷惑かけてばっかり。

最初にあつた時もそう。

病院のベランダもそう。

病院の屋上もそう。

芳佳は泣いていた。

僕は立ち上がる。

ショウ：

それは違う！！！

僕は全然迷惑だなんて思つてない！

僕が芳佳の事が好きでやつて いるんだ。

シヤ美ロ越へ一十

三才物語？

そこで僕は芳佳を抱き寄せ、

ショウ・

そう 僕達の物語は芳佳が飛び出したあの時に始まつたんだ。
さあこれからもこの物語を僕達2人で歩んでいこう。

ヨシカ：

はい！
はい！

僕達は歩き出す。

この物語という道をそつて…

【第十七話】（後書き）

ついに最終話を迎えました。

なんかありきたりな終わり方をしたなと思ったのが本心です。
次の小説はもっと考えて書きたいです。

これで終わりなので御意見、御感想をいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5478o/>

あの時にこの物語は始まった…

2011年10月8日03時56分発行